

# 仏教音楽 人物伝

- 8 -

福本 康之

清水 脩 (1911~1986)

Shimizu Osamu

合唱・声楽作品の作曲者で  
日本の創作オペラの牽引役

## 仏教のこころ 作品通し音楽界に

仏教音楽作品の多くは、法要や教化活動の現場で演奏されることを念頭に書かれています。と同時に、コンサート会場で演奏される、仏教的な内容を題材とした鑑賞用作品も少なくはありません。そのような鑑賞用作品を手がけた作曲家のひとりに、大阪市天王寺区・佛足寺(真宗大谷派)の出身で、《恩徳讃》(新譜)の作曲者として知られる清水脩がいます。

清水は、大阪外国語学校(現在の大阪大学外国語学部)在学中に合唱活動に魅せられ、大谷楽苑(真宗大谷派の音楽団体)の後押しもあり、27歳にして東京音楽学校(現在の東京藝術大学音楽学部)の選科生(一般にいう聴講生のよいうなもの)となり、本格的に作曲を学び始めました。28歳にして第8回音楽コンクール作曲部門で第1位に輝くなど、ほどなく清水は日本音楽界で

認められる存在となります。合唱を音楽活動の出発点とした清水は今日、数々の合唱・声楽作品の作曲者として、また日本における創作オペラの牽引役として、高く評価されています。そうした創作活動において清水は、多くの作品の題材を仏教に求めました。代表的な作品としては、《大仏開眼》などのオペラ作品、《阿難》

や《歎異抄》などの交声曲(カントータ)、《廟堂頌》などの



蓮如上人をテーマとしたオペラケストラ付き声楽作品の自筆譜表紙

合唱曲があります。

もちろん、広く日本音楽界を見渡せば、仏教に題材を求めた作曲家とその作品を見つけることは、難しくありません。

しかし、寺院に生まれたものとして仏教のこころを大切に、音楽作品を通してそれを伝えていくことを自らの創作の柱として取り組んだ作曲家、しかも仏教界という枠を超え、音楽界というフィールドでも作品を通して仏教のこころ問いつけた作曲家という点で、清水は貴重な存在といえるでしょう。その意味で、大谷楽苑のご縁は清水にとって決して小さなものとは言えません。

こうした姿勢で作曲にあたっていた清水脩が、どのような想いで《恩徳讃》を作曲したのか、親鸞聖人がご和讃に刻まれた内容とともに、あらためて考えてみたいものです。

(本願寺派総合研究所 仏教音楽・儀礼研究室長)